

芥川龍之介『歯車』をめぐる

——シンポジウム報告——

平野 芳 信

一

去る一九九五（平成七）年十二月九日、数えて第五回目のシンポジウムが山口大学人文学部二階会議室で開催された。今回は初めての試みとして、研究懇話会を同日の午前中、近代文学談話会を午後に行なうことになった。テキストには芥川龍之介の『歯車』をとりあげ、パネラーは中村智氏（一九九五年院卒）、副田賢二氏（一九九二年卒）、中原豊氏（一九八〇年卒）の三名が務め、司会は平野芳信（人文学部教官）と武山恵奈（院一年）が担当した。

二

発題の一人目、中村智氏は『歯車』が芥川の晩年の作品ということで作家と直結されていたが、最近になって表現固有の問題が論じられ始めた研究史の把握をまず行った。ついで「レエン・コウト」という言葉が、それを発した「僕」という主格を離れ、「幽霊」そして「死の暗喩」というように変質し、ついに主客関係が転倒するにいたった状態を「〈独り歩き〉する言葉」と表現

した。次に氏の論点は『歯車』と同時代の他のテキストに向けられ、小説の書けない小説家が頻出する事実を指摘する。それに対して『歯車』の「僕」は、とにかくどんどん書ける小説家であり、それにも拘らず苦しみは倍加しているのではないかという点で特異であるといえ、しかも、読む「僕」という問題に関わると考察する。読む「僕」とは、多くの場合、何らかの形で他の作家の作品を読むことで脅かされる。つまり、そのようにして読むことでしたぶられるのは、実は「僕」が書ける小説家であることと密接な関係にあると述べる。さらに翻って、それは読まれる「僕」という問題に派生するとする。つまり作家としての評価ということだが、総じて、書ける小説家としての「僕」は、書けば書くほど閉塞状況に陥ってしまうというわけであり、留意せねばならないのは、「僕」の息苦しさや「語り手」と等価のものではないことである。この話を構成する主体は、最初から最後まで冷静であり、それは最後の部分に、まさに「落ち」らしい「落ち」が設定されていることと無縁ではないと強調して発題を終えている。

二番目の発題者、副田賢二氏はまず、『歯車』というテキストを考える上で、最初の「レエン・コウト」の章に描かれた「松林」の意味に注目する。それは希望的な場として「僕」によってみな

され、その限りに於いて「僕」が社会的現実的に規定される場でもあるという。しかしその「松林」のある避暑地から東海道のある停車場へ移動したときある変換、変質が生じている。すなわち「僕」はたえず創作行為を続けているが、それが現実的であるのは一章までで、二章以降、書くことは「僕」の本質的に抱える行為でありながら、同時に疎外されている行為となってしまう。これがこの作品における書くことの意味合いである。それは実は「僕」なる存在の主体性が剥ぎとられることと同義であり、二章以降の変換の後、「僕」は秩序のない無時間の中で歩行する存在となってしまう。そこでは「僕」は何者かという存在の仮構と、そこへの自己の全的な投げかけによってかろうじて成立していたが、作品の最後で他者としての妻の介入によって、「僕」の作品内で維持しようとした構造が無化させられてしまうといっている。

パネラーの殿、中原豊氏も前二氏と同様に、『歯車』が芥川晩年の死を目前にしていたがゆえに弛緩した作品であるという通説を、ディコンストラクトしようという意志に貫かれた発題であった。氏はこのテクストの時間構造に注目し、「すると」といった接続詞や「いつか」「やっと」というような副詞について言及した。それらの品詞が文法的には決して誤用されてはいないが、微妙な違和感を抱かせる効果をもつことを指摘する。それは時間意識に裏打ちされた前後関係が曖昧になっているためであるとし、そこに日常的時間の歪形が認められるという。同じようなことは、たとえば二章の「本屋」と三章のストリンダベルグの「伝説」を見つけた丸善が実は別の本屋であるというような一種の場面転換にも指摘しうるわけで、氏はそれら品詞をも含めたこの作品の文体的特徴を悪夢のような構造と定義し、「歯車」というタイト

ルとの関連を指摘している。ついで氏の論及の予先はおびただしい暗号が描きこまれた点に向かう。たとえば「レエン・コウト」「オオル・ライト」「火事」「口髭」といった記号はすべて主人公の義兄の死の予兆として意識されるが、このような本来何の関係もないはずのものが、偶然にある意味をもってつながっていく背景にはユングのいわゆる共時性、あるいは物理的に不可逆的に進むクロノスの時間ではなくて、タイミングとしてのカイロスの時間、時機というものが『歯車』を支配しているとしている。最後にタイトル「歯車」にかかわり、それが時間的表象として選ばれた可能性について言及し、ある意味では異時間というものを構成した稀にみる見事な小説作品であると断言している。

三

休憩の後、討議に入ったが、今回は時間の関係で質問用紙を出席者に配布し、それに質問事項を記入する形式がとられた。最初に中村氏のいう「落ち」らしい「落ち」の内実に関して質問が集中し、この点をめぐって議論が推移することになった。中村氏は「落ち」について、『歯車』という話がものの見事に「始め・中・終り」という話の型にはまっており、まさにその意味で「僕」が一見混乱したような出来事が描かれてはいても、決して「語り手」は錯乱しているわけではないと補足説明をした。それに対して金戸清高氏が、この作品はあくまでも一人称で書かれており、語り手「僕」と捉えるのが順当ではないかと質問した。中村氏是一章の最後の部分とそれ以降の時制の微妙な変化を指摘し、そこに「僕」とは別の二人称の語り手が存在していると答えた。その後、

田口律男氏がそれを「落ち」と呼びかは保留しつつ、このテキストにはある種のしっかりした構成意識が認められるが、何をもって「始め・中・終り」といいうるのかその根拠を示すことが求められた。

司会者がそれを中原氏のいう時間意識に絡めるように促したところ、中原氏の方からこの作品に流れている時間は、通常の不可逆的なそれではなくて、因果関係の崩れた状態そのものの表現のような異時間というべきものであるという返答があった。柴田勝二氏は「始め・中・終り」という構成意識はアリストテレスのいわゆる「詩学」に基づくものであって、劇の構成法であると指摘した。柴田氏はまた、中原氏には因果律の成立しないというのとはむしろ、この作品においては逆なのではないかと反論した。それに対して、中原氏は「因果」という用語のとらえ方が、裏表の関係になっていて、自分は因果のない世界に因果を見る立場をとっている、別の言い方をすれば偶然と考える方が因果的なのだがそれを偶然と考えるからこそ、接続詞の使い方に特徴が生まれるのだという。

一方この議論に絡む形で水本精一郎氏は、この時期いわゆる二十世紀文学の意識の流れるもの、ある種先取りのようなものがこの作品に認められるのではないかと述べた。それは中村氏の用語でいえば、「冷静な構成意識」ということであろうし、副田氏の言葉をかりれば、「書くことそれ自体の問題」であろうというものであるという。この後議論は、書くという行為の主体性を中心に展開することになる。副田氏は主体的に書くことが、逆にその主体性を書き手から奪い取っていく、疎外していくという構造に問題があるといい、田口氏がそれを統一的なアイデンティティ

のようなものが、剥離されて解体されていく、それがたとえば因果なき因果ということに関わるのではないかとパラフレーズする。そして改めて、田口氏から副田氏に主体性が分裂させられた曖昧な私が受け入れていく微笑、ユーモアといったものが、なぜ逆転されてネガティブなものとして収斂されるのかという点が質された。副田氏はそれに答えるために、『冬と手紙』を合わせ鏡的に提示し、絵画論にまで話題が拡散し、その延長線上に志賀直哉の『焚火』との関係が措定されはじめるにいたって、司会者がやや強引に作品そのものに話題を引き戻す一幕があった。

その後、中村氏の言葉の一人歩きの問題について、散発的に質疑応答があったが、議論はそれ以上の深まりを見せなかった。終盤において三人の方からそれまでの議論をふまえ、しかもある意味で偶然に、共通したそれぞれの立場での結論めいた発言があった。すなわち金戸清高氏は、それを決して新しいと評価できないが、たとえば漱石の『行人』のパターンを踏襲したかのような周到な手順をふんでいる印象が『歯車』には認められるようになったという。柴田勝二氏は、この作品はあくまでも芥川の自我の構造が崩壊してゆく過程を描いているが、最後のそれを「落ち」と呼ぶかどうかはさておき、その収束の仕方は意識的であると発言した。水本精一郎氏は、「僕」は確かに崩壊し、死に収斂してゆくわけで、それを作家論的にいえば悪魔とか神とかの問題ではなく「なにものか」としかいいえないものに、意識的に向かう運動のようなものがこのテキストには確かにあるのではないか。だから最後の「落ち」に関しても、現実からのしっぺ返しというだけにとどまらず、むしろ創作が極点に達したときに起こるすべてがもう無になってどうにもならなくなったところまできて、初めて

なにかが出てくる状態というように考えたいというようにまとめられたかと思われる。

最後に森下辰衛氏のレインコートは雨から身を守るものであると同時に隠すものであり、中身は幽霊だという自己認識をはじめとする犀利な指摘を含む発言があった。また小川卓氏からは「レエン・コウト」と「僕」の関係に関する点をはじめとする幾つかの質問があったが、時間が五時三十分を過ぎたこともあって、司会の判断で十分な議論を尽くせぬまま会を閉じることになった。

四

最初に書いたように、今回のシンポジウムはこれまでとは異なり、時間的な制約があった。それが会の内容に影響を及ぼすことが懸念されたが、終わってみれば杞憂であったように思える。おそらくこれまでは、芥川龍之介の遺稿ということで『歯車』は生身の作家の肉体の死から逆照射される、光のハレーションに目を奪われざるをえなかったであろう。が、これからはそうではなからう。芥川文学晩年の再評価の機運は醸成されつつある。今回のシンポジウムもその一翼を担っていることを、筆者は信じて疑わない。

いうまでもないことだが、限られた紙数のなかで、三時間半を越える討論をすべて再現することは不可能であった。それは筆者の能力をはるかに越えていた。話の流れの中で意識的に省略せざるをえなかった意見が多々あった。諸賢の諒を請う次第である。